令和4年度第1回亀岡市社会教育委員会議　会議録

1　日時　令和4年7月20日（水）　午後1時30分～午後3時30分

2　場所　亀岡市役所　1階市民ホール

3　出席委員

工藤　和之　議長
山田　昌子　副議長
中嶋　知彦　委員
野々村　誠一　委員
明田　晋治　委員
入江　治雄　委員
木本　裕子　委員
黒川　孝宏　委員（所用のため途中退席）

4　欠席委員

中澤　博幸　委員
川口　研一　委員
猪子　純子　委員
池田　恭浩　委員

5　出席事務局職員

神先　教育長
片山　教育部長
樋口　社会教育課長
山﨑　社会教育課人権教育担当課長
森　　社会教育課放課後児童係長
大槻　社会教育課主査
岩崎　歴史文化財課長
小川　図書館副館長

6　傍聴者

なし

7　議事の概要

①　開　会
②　委嘱状交付
③　開会挨拶
④　委員紹介〔自己紹介〕
⑤　事務局職員紹介〔自己紹介〕
⑥　議長・副議長選出

⑦　連絡・報告事項
〔1〕令和4年度亀岡市社会教育事業概要
〔2〕令和4年度亀岡市人権教育事業概要
⑧　その他
〔1〕令和4年度亀岡市社会教育委員活動計画について
⑨　閉会挨拶
⑩　閉　会

【議事に対する意見】
⑦　連絡・報告事項
〔1〕令和4年度亀岡市社会教育事業概要
〇委員
　令和4年度亀岡生涯学習市民大学を開講している。すでに実施が終わっているものもあるが、1講座単位での受講が可能なので興味を持った講座にぜひ申し込んでほしい。

〇議長
　亀岡市子ども会事業については、亀岡市子ども会育成連絡協議会において今年5月22日と7月17日に育成者交流研修会を実施している。5月22日は社会教育課放課後児童会運営指導員である高橋理博先生に子育てについてご講演いただき、7月17日は七谷川野外活動センターで飯盒炊爨（はんごうすいさん）を行った。飯盒炊爨（はんごうすいさん）は保護者対象としていたが、子ども達にも参加してもらい、保護者が子どもに安全な野外活動を教える機会となった。

〔2〕令和4年度亀岡市人権教育事業概要
〇議長
　女性集会については、昨年度の社会教育委員会議で女性集会の名称について変更してはどうかと意見が出ていたが、女性集会実行委員会の中で検討されていくと聞いている。
　亀岡市はたちを祝う会（仮称）については、民法改正により成人年齢が18歳に引き下げになったが亀岡市では引き続き20歳を対象に式典を行うと聞いている。名称は現在仮称であり、今後、式典対象者18名で構成された実行委員会で検討された後に決定されるが、決定した名称は社会教育委員会議で報告していただき、社会教育委員から意見を頂戴できればと思う。

〇社会教育課長
　亀岡市はたちを祝う会（仮称）だが、先日の実行委員会で令和5年1月開催予定の亀岡市はたちを祝う会（仮称）のテーマが「灯（ともしび）～主人公（はたち）が創るストーリー～」に決定したので報告する。

〔3〕令和4年度亀岡市社会教育委員活動計画について
〇議長

この7月から初めて社会教育委員として委嘱された委員がおられるので、社会教育委員の活動について説明する。社会教育委員とは、社会教育法第17条第１項第3号にあるとおり、当該市町村の教育委員会から委嘱を受けた青少年教育に関する特定の事項について、社会教育関係団体、社会教育指導者その他関係者に対し、助言と指導を与えることができる立場である。社会教育委員は、独任制が取られているので、それぞれの立場から社会教育の推進に向けて独自で活動することは可能であるが、できれば社会教育委員全員での取り組みができればと考えている。

コロナ以前には地域学校協働活動推進事業のために、社会教育委員が亀岡市内の小学校に行って各学校の取り組みを視察するといった活動を行い、その後情報共有や意見交換を行う計画であったが、コロナ禍によって中断してしまった。未だコロナウイルスの収束の兆しが見えない中ではあるが、何か社会教育委員としての活動ができないかと考えていた時に、南丹地区の社会教育委員の活動を知った。京丹波町では図書館の活性化に向けた活動に力を入れており、社会教育委員が図書館に出向き、図書館に対する意見や提案を行っている。現在、亀岡市では、市立中央図書館がリニューアルの計画をしているとのことなので、社会教育委員で視察を行い、意見や提案を行えればと思う。

【情報提供】
〔2〕その他
〈亀岡高校生による「まなびサポート」事業について〉
〇委員

亀岡高校では、本校2・3年生が亀岡市内の小中学校に出向いて、放課後児童会や各校の授業や学習会に参加するという活動を始めた。取組概要にあるように1期を7月11日から8月24日に設定し、亀岡小学校は日程調整の都合で1日しか実現ができなかったが、放課後児童会では13日間、亀岡中学校では5日間実施する予定である。新規事業はアドバルーンのように一時的に実施するのではなく、長く継続して実施していくことが大事だと考えている。生徒は部活動や授業などがあるので、その活動の妨げにならないように、希望を募り、希望したからには責任を持って参加するという指導をしている。また、小中学校に出向くということは、その校舎に高校生が入った瞬間に小中学生にとって「先生」という立場になるので、コロナの感染対策や守秘義務についても事前にオリエンテーションを行い、きちんと理解したうえで参加するよう説明している。既に亀岡小学校で実施したが、事業実施後に児童の様子を伺ったところ、児童の反応は非常に良かったと聞いている。また、教師や保育士になることに興味がある高校生にとっても、「思っていた以上に先生は大変だ」とか「やりがいがある」といった気づきがあったようである。「地域の子どもは地域で育てる」といった言葉を自分が若いころによく聞いていたが、教えられる側の小中学生にとっても、教える側の高校生にとっても、この活動が地域への愛着に結びつくような経験になったと思う。

【社会教育事業全体に対する意見】
〇委員

この前、NHK のクローズアップ現代で小学校の教員の働き方について取り上げられていた。子どもに関わる職に就いている自分にとっては、共通した課題を感じた。早速、自園で、園内研をもち番組を視聴した。各人が関心をもって視聴していたように感じる。視聴からは、「働き方を工夫して、時間と捻出し、余裕を得たことが大切。」という事例を学び、園内では「余裕」が「保育の質」につながるようにすることとは何かを話あった。

また、最近、これからの社会教育について取り上げた本を読む機会があった。この本を読むと、社会教育が地域の活性化に繋がることや、若者にとって地域と関わることで多様な生き方の中から自分の生き方のモデルを見つけるとともに、自分が地域の中で何ができるかといった考えにつながるといった話があった。社会教育は社会と自分との関わりにより自身の在り方を見つめるきっかけになるとともに、人と人との隙間を埋めてくれる斜めからの関係を作るものだと感じた。

〇委員

先にまなびサポート事業に関する話があったが、我が子が学校から帰ってきた時に、亀岡高校生が学校に来て、とても楽しかったと話していた。PTA については、最近ニュースや新聞で取り上られているように、時代の変化とともに組織の在り方が問われている。PTA は時代に即した組織に変わらなければならない局面にあるのではないかと思う。私は山の方に住んでいるが、人口減少により地域行事などの継承が難しくなってきている。また社会教育委員の皆さんから、どうしたら地域活動が盛り上がるかなどの意見を頂戴できたら有難い。

〇委員

霧の芸術祭「アートでつながるあなたとわたし」という作品展を8月に開催する予定である。この作品展は、かめのこ学級・ふれあい学級・かめの会の中で作られた作品を展示する。私はプランナーとして、作品を制作しているところを見学したが、作品が完成するには、本人だけではなく、それに携わるボランティアの方や、保護者の方の力があってこそだと感じたので、作品展に「アートでつながるあなたとわたし」 とタイトルを付けた。展示内容は、障がい者成人学級生の作品や、作品制作風景だけではなく、学級生と講師が触れ合っている姿も感じてもらいたいと思い、広報プロモーション課の協力のもと、ショートフィルムを作成した。

私は元々このような企画をすることを専門にしているのではなく、絵を描くことを仕事にしており、デザイナー兼イラストレーターとしての活動の他、週に1回東京藝術大学で講師をしている。昨年、亀岡市内の小学校に訪問し、デジタルアートの講義や「アートとはなんだろう？絵を描くことってどういうことだろう？」といったテーマで、子どもたちに話をすることがあった。保護者から、子どもたちにとってとても楽しい機会となったという感想を多く聞くことがあり、亀岡市役所の近くに場所を借りて、子どもを対象としたアートの教室を開くようになった。そこで子どもたちと一緒に絵の具まみれになりながら活動することが、私にとっても

子どもたちにとっても刺激になっているように感じる。また、私には子どもがいて、親でもあるので、親目線でもアートの面白さや、人生をどう楽しく豊かに生きていくかのヒントを皆で探していくことに興味があり、そのための活動に力を注ぎたいと思っている。最近、亀岡高校に訪問することがあり、亀岡高校の生徒と一緒になって何か活動ができないかと考えている。

亀岡市役所の地下には、2、3年前に「開かれたアトリエ」が完成し、かめおか霧の芸術祭の中で、自分の作品を置くことがある。市民からは、「芸術祭って何か難しいことをしているのね」とか「自分の作品を開かれたアトリエに置きたいと思って、市役所に聞いたら断られた。開かれたアトリエというのに開かれていない」との声を聞くことがあった。このままではいけないという反省を感じながら、今回プランナーとして責任をもって「開かれたアトリエ」に携わっている。「開かれたアトリエ」を本当に開かれたものにするにはどうしたらいいかを日々考えているので、社会教育委員としての活動の中でヒントを得られたらと思う。例えば、先ほど紹介があった人権教育に関するものにアートを取り入れると、難しい内容であっても人に伝わりやすい形で紹介できるのではないかと思う。

〇委員

私はボーイスカウト活動に携わっている。ボーイスカウトは今年60周年を迎え、5月に亀岡市役所市民ホールで記念式典を行った。ボーイスカウトは青少年健全育成という大きな目標に向けて、ボーイスカウト日本連盟、ボーイスカウト京都府連盟の施策に合わせて活動を行っている。ボースカウトのリーダーは年代に分けて、それぞれ決めている。亀岡市のボーイスカウトは60名ほどいるが、幼稚園の年長～小学校2年生はビーバースカウト、小学校3年生～小学校5年生がカブスカウトといったように年齢に応じて区分があり、「隊」に分かれて活動を行っている。また、その隊の上には指導員がいるといった組織になっている。

ボーイスカウトは活動を通じて、学校や家庭で解決ができない問題などの解決の糸口を見つけられる場になればと思う。楽しく明るく活動するとともに、上下関係をきちんと指導しているため、小学校2年生でも幼稚園の子どもに対して、お姉ちゃんお兄ちゃんという意識をもって接し、それぞれが責任をもって活動を行っている。

コロナ禍で十分に活動できない時期もあったが、7月には地域の方と子どもたちが一緒に丸太を切ったり、加工したりという活動を行った。丸太を切るのに「危ないよ」といって子どもたちがやろうとすることを制するのではなく、危ないことでも大人が見ながら一緒に体験することで、学ぶことが多々ある。また、切った丸太をロープで結ぶという作業をすることで、普段の生活で新聞紙を束ねてまとめる時に紐で結ぶことができるようになっているというように、ボーイスカウトで学ぶことが日常生活に生きてくることがある。私たちは地道にいろんな体験の場を提供することで、ボーイスカウトの活動に参加した親子が一緒になって楽しい一日となるように計画している。ここ3年は新型コロナウイルス感染症の影響により、活動を控えざるを得ない状況であったが、最近になり、感染症対策を講じながら少しずつ活動する機会を増やしている。今後、社会教育委員の活動の中で、他の委員から意見を頂戴

したり、他団体の活動を知ることで、ボーイスカウトの活動に生かしていきたい。

〇委員

いろんな立場にいる社会教育委員の活動を聞くことで、多くの人との関わりの中で社会教育は進んでいくのだなと実感した。私が教師をしていたころは、教師だけが子どもを育てる立場にあるという気になっていたが、そうではないのだなと改めて思った。社会教育というのは、たくさんの人の力によって成り立っており、地域で支えていかなければならないものだと思う。